幼兒の流行病

醫學博士　田村　均

一つから九つまで、此「つ」の付く間は育兒上の難關であるとよく言はれて居りますが小兒科醫の側から見てもさうであります。幼稚園時代を終るまでは其前半でありまして後半に比べますと又遙かに子供の病氣の多い時代であります。この十歲迄の間に子供の罹る傳染病は隨分數が多いのでその主なものが八種類ばかりもあります。其病名を擧げてみますと、痲疹(はしか)。百日咳。水痘(みづぼうさう)。流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)。風疹(かざはな)。ヂフテリー。猩紅熱。赤痢等で勿論ごの子供も皆罹るといふわけではないが多數の子供は十歲位迄の內に其數種類を經過するもので、二三にとどまるものは、十年間戰場を往來して彈丸を身に受けなかつたやうな幸福な者の例でありませう。從つて愛兒を育てる上に以上の病名の症候其他について大要を識つて置く事は大切でありまして、皆樣の多くは既によく御存じの事と存じますが、もう一度記憶を新にして自分の知識を整頓して置くのも必要であり、役立つ日があることゝ存じます。以下順を追ふて概略を申述べることに致します。

1、痲疹。

これは不思議な性質をもつてゐる子供の病でありまして人と生れたからには一度は必ず罹る。子供の時代殆ど凡ての人が經過する病でありまして極く稀には成人してかゝる場合もあるが例外であります。一度罹れば先づ二度やる事は極く稀で一度痲疹にかゝると體內に痲疹の病原體に對する十分な抵抗力が出來るので之を免疫と申しまして、體內に免疫體が十分に發生したわけであります。痲疹は大層規則正しい病氣で注意いたしてをりますと極く診斷のつき易いものでありますが、その當初は感冒に似てゐる點が多いので不用意であると氣が付くのが遲れ勝ちになります。小

兒科醫としては診察の折に常に頭から離れることのない病であります。規則正しい病であるといふことを申上げましたが先づ第一が潛伏期で之は十日間であります。人から人に感染いたしますが感染して十日間は潛伏期と申しまして何の容態もなく過ぎます。十日間の潛伏期が過ぎると發病いたしまして第一期(カタル期)で四日間つゞきます、鼻汁が出たり、せきが出たり、くさみ、目やにが出る。つまり鼻咽腔や目の結膜にカタルが起る。中等度の熱が出る。感冒によく似てゐるが目やに、くさみの多い點に注意しなければならない。四日間のカタル期が過ぎると第二期の發疹期に入ります。麻疹の本幕であります、耳の後あたりから顏面にかけてパラパラと赤い粒があらはれます。胸から腹部手足と皮膚の發疹がひろがり約三日間かゝつて全身くまなく發疹致します。其頃には始め發疹した部分の赤味が減じて黑味がゝつて來ます。發疹期は高熱で三十九度から四十度にも達し皮膚ばかりでなく氣管枝の粘膜や腸管の粘膜にも發疹するので咳が烈しく下痢も起る。順調にゆくと發疹が出きつた頃から追々に熱が下り微熱となり三四日して平熱となつて第三期落屑期に入り糠のやうに細かく皮がむけて來る。やがて平熱となり恢復期に入り、咳も減少し下痢も止り、食慾も增し元氣になります。發疹期には膀胱カタルも起るので尿の回數を增す事も多いのであります。

順調でない場合には以上の容態がこだわつて來て熱が下らない、例へば氣管枝カタルが肺炎に進むとか膀胱カタルがひどくなり腎盂膀胱炎で高熱を發するとか、中耳炎が起つたりなどします。麻疹で生命を奪はれる場合は過半數肺炎である。麻疹肺炎と云つて治り難いのであります。

麻疹の看病で知つてゐなければならない最も大切な點は發疹期の最中に高熱でせきが多くても徒らに心痛する事はないが、發疹期が過ぎても熱が下らないで咳が多く、うなつたり(呻吟)、食慾がなかつたりする時、或は子供が少しも笑顏を見せない時には肺炎が殘つたのではないかといふ事に留意しないと手遲れになる。看病は暖かくして無理をしないのが最も肝要であります。氷は一般に用ひないものと思つてゐてよろしい。

2、百日咳。

麻疹と共に子供の大厄である。近頃大に著目されて來た子供の結核の誘因をなすものはこの二つが最も多いのであります。大人の肺結核は子供時代の淋巴腺結核(腺病性體質)の延長であるといふ事が知られその小兒結核の誘因をなすものであるから大いに警戒して重くせぬやうに取扱はねばなりません。ところが一般に百日咳の診斷確定が遲きに過ぎる傾向であります。百日咳のワクチン注射なぞも廣く行はれてゐるが初める時期が遲れるので效果が半減します。百日咳固有の咳込みにならない前にワクチン注射を勵行したいものであります。子供が咳が出て平熱であるのにだん〳〵咳が多くなり夜間殊に多く、せきに力が入るといふやうな時には豫防注射をかねて先づ百日咳ワクチン注射を開始します。咳の樣子をみてゐて豫防だけに留める時には隔日三回注射で止め、若しだん〳〵咳込むで來るやうになり顏を赤くして體を前にこゞめて咳入つたり咳の後嘔吐があつたり咳の時泡沫樣の痰を口角に出して苦しがつたり所謂百日咳の第二期に特有な發作性痙攣性咳嗽となつたら其まゝ注射をつゞけ、普通隔日に七回注射をしてワクチン量を十分に達せしめます。近頃ではワクチン量が十分な上にも十分である方がよいと云はれてをります。發作性痙攣性咳嗽といふのは咳がひどくてひきつけるやうになり、間は何のこともないやうにしてゐて時々發作性に時を切つて咳込むから言ふので、咳込みの後にはヒイとながく息を引込みます、咳込むで出す息ばかりのあとであるから深く吸引するのであります。幼稚園の年齡になると吸引しますが赤チャンではむせるやうに咳込むだけなので輕いと思つてゐて赤チャンを犧牲にする事が少なくありません、乳兒期の百日咳は特に恐ろしいものであるといふ事に留意しなければなりません。やはり肺炎でこられるので百日咳肺炎と云つて麻疹肺炎と東西の大關であります。百日咳は無熱であるやうだが毎日體溫を測定すると三四日に一回位は微熱があるものであります。發熱が續いたり殊に高熱であるのは惡い兆候であるから十分熱の原因をつきとめ早くに治療しなければなりません。百日咳にかゝつて半歲から一年位は風邪の度に又百日咳かと思ふやうに咳が强くなる場合があります。何しろ子供の體が弱る病氣であるから大體に治

つてからも養生が大切であります。

3、水痘。

これは大多數輕くすむ病氣です。發熱と同時に身體諸所にパラパラと水疱が出來る、水疱は注意して觀察すると當初第一に赤くなり、次にふくれて水をもち、水疱はうむで膿疱となり、黑くかせて痂疲(かさぶた)を作つて治ります。水疱が新に出來て膿疱に變化して行く間は熱が出ます。時には高熱三十九度四十度も發するが二三日で平熱となつて全快します。餘病も尠い。潛伏期が二十日間前後もあつて長いので忘れた時分に兄妹に發病します。感冒時のやうな手當をして置けば治るが稀に重いものもあります。

4、流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)

耳の下から顎へかけて唾液(つばき)を分泌する唾液腺が三種あります。耳下腺顎下腺等であります。多くは耳下腺が侵され一側或は兩側はれて發熱します。腫れ方はひどいが烈しい痛みや化膿する事は殆ごありません。高熱が出るが二三日で下り、はれも數日で追々小さくなります。腫れ方も急だが小さくなるのも割合に早く、食事の時に多少いたがる位であります。腫れの引く迄は安靜にしてゐて氷で冷すとよろしい。これも潛伏期が長く二十日前後であります。睾丸が腫れる事があります。

5、風疹(かざはな)。

麻疹と誤られ易い、麻疹を二度やつたといふ子がよくあるが一度は風疹である場合が多い。皮膚の發疹だけみて病名を定めやうとする爲に陷る誤であつて麻疹とは經過は異るが發疹の多寡や輕重で定めやうとすると誤る事があります。幼稚園の年齢に最も多い。麻疹と異つて四日間の有熱カタル期といふやうなものはなく、家人は殆ど發熱と同時に發疹を認めるでありませう。食慾不進、不機嫌、惡寒等多少の前ぶれはあるのですが目立ちません。之を反對に言ふと發熱と同時に發疹するものは麻疹ではないといふ事を記憶しなければなりません。風疹も輕い病で餘病は殆どなく、潛伏期が長く、感染してから半ヶ月以上二十日前後して發病します。人から人に感染する點は以上の他のものと同一で潛伏期の終り頃から發疹期が感染力が大きいのであるから通學については何れも此點に注意し。お互に德義を守る

やうにしなければなりません。發疹の消える頃には感染力も殆ごなくなると云はれてゐます。麻疹の輕いのと似てゐるが麻疹のやうに萬人が罹るといふわけではありません。

6、ヂフテリー。

多くは扁桃腺を侵します。乳兒では鼻のヂフテリーも比較的に多いが、幼兒では扁桃腺のヂフテリーが益々多くなります。扁桃腺に白いものがつき、苔狀にひろがり、白く紙をはつたやうにヂフテリー性義膜といふものがついて特有な所見を呈するので、のどの診察さへ怠らなければ決して見落され得ないものであります。診斷が確定すれば治療血清が發達してゐてその十分量を用ひれば神速の效果を呈するものであるから、今日文化の中心點に居住するものは決してヂフテリーで愛兒を失ふやうな事があつてはなりません。稀に子供の診察の折いやがるからと云つてのどの診察を拒まうとする人がありますが、のどの診察をしないなら子供の診察はしなかつたのと同然であると考へて頂きたい。ヂフテリーで死亡する第一歩はそこにあるのです。子供ののどをみるといふ事は熟練してゐてもひどくあばれたり光線が十分でなかつたりすると割に困難である事があるから十分に、徹底的にのどの奥までみるといふ事が何よりも大切で、親としては十分にみせるといふ事を忘れないやうにして頂きたい。ヂフテリーはのどにそれだけのひどい變化があるが、痛みは訴へるとは限らない、初めの間は訴へないのが普通で扁桃腺だけの變化の間は發熱以外何の容態もありません。扁桃腺周圍炎を起すに至つて痛むで來るもので、犬の吠えるやうなせきなぞをあてにするのは大きな手遲れであります。ヂフテリーは一瞬を爭ふ病のやうに考へる人が多いが發見が遲いからであります。發熱も亦普通の感冒性扁桃腺炎のやうに高熱でない場合が多い、高熱のこともあり微熱のこともある。一瞬を爭ふものでないと云つたがゆる〳〵してゐる病でもない。ある時期を過ぎると急轉直下病症が惡化し、その毒力は心臟及び血管を侵して如何ともする事が出來難くなり、十分量の血清も遂に效果がなく、意識鮮明のまゝ冷汗を流して死に行く事があります。何病でも手遲れは惡いがヂフテリーに於て殊になさけなく感じます。それは治療血清が進歩してゐるからであ

ります。近頃では治療血清の他にヂフテリー豫防液が廣く用ひられるやうになり、三回の小注射で認むべき效果があるのであるから必ず勵行すべきであります。ヂフテリーに罹つて治つた者でも稍〻時を經て醫師に相談して施行して置くのがよろしい。

7、猩紅熱。

幼稚園から小學校時代に多くて困る病氣であり、以上のものと異り法定傳染病でありますから、法律で屆出の義務があり、傳染病室で隔離治療をしなければならないので家庭で治療する事はゆるされない。死亡率は或書には三〇%とされてゐるが今日では死亡率は少なく三%位のもの卽ち百人に三人位のものであると云はれてゐるが、傳染病の病毒には消長があり、惡性に傾いて來る事もあるから往時恐れられてゐた病は決して輕々に考へる事は出來ません。時時電擊性猩紅熱と云つて發病間もなく意識溷濁、そのまゝ兩三日で死亡するものがあり夢のやうであります。幼兒の恐ろしい病は疫痢ばかりではない。それ程でなくても中毒型猩紅熱と云つて高熱意識不鮮明となり隨分心痛する容態に陷るものがあります。輕くても三週間安靜臥床が建前で多くはその前半が有熱、後半が無熱又は微熱であります。無熱になつても發病から日の淺いものは床についてゐなければなりません。病毒は未だ血中から消失しないので安靜をかくと頸の淋巴腺が腫れたりする事が多い。安靜を守つてゐても三週間前後して淋巴腺が腫れたり、腎臟炎が起つて血尿となるものも少なくありません。發病當時の容態は發熱と同時又は十數時間遲れて皮膚に赤い細かい發疹があらはれ胸から腹部及び兩下肢の上方に特に目立ちだん〳〵全身にひろがる。發疹が密生すると皮膚が全體に紅くみえる。顏面も紅潮して鼻の下から口のまはりが三角形に白くぬけて見える。數日後に發疹が消えて熱が下りかけると早いものでは皮がむける、ボロ〳〵大きくむけ、手足臀部がひどい。隨分おくれてむけるものもあります。落剝期と云つて次で恢復期に入り食慾も增進して全快いたします。

8、赤痢。

赤痢についても申上げたい事が多いが餘り長くなるから極く簡單に致します。我國では相當の家庭でも隨分赤痢に

かゝる率が多いが、大體に以上の病と異つて飲食物を注意してゐれば防ぎ得るものでこの點チブスと同樣であります。幼兒にもチブスもあります。赤痢は子供の方が大人より重く、チブスは反對に子供では割に輕くすむ傾向があります。赤痢で注意すべき點はどういふ場合に生命を奪はるるかといふと、便の回數が多いといふことより、發熱の持續するものが惡いのであります。當初には殆ど皆高熱であるが適當の手當により間もなく平熱となるものは輕いので便の回數が多くても死亡する事は稀です。一度下つた熱が再び高熱となつたり、高熱が當初より依然として持續するものは死亡型のものであります。その中間のもの、中等症のものは一度下つた熱が又出るが三十八度前後にとゞまり約一週で平熱になり、手當がよければ大抵は死亡しません。便の回數は二十回位迄は隨分粘血便の見た目が恐ろしいやうでも大丈夫であります。幼兒期で一日三十回以上も便の回數のあるものは熱が低くても重症であります。一日五十回といふやうなものもあります。それでも直るが著しく衰弱するもので、さういふ重いものは食慾もありません。然し高熱が持續して中毒症狀の强い疫痢又は疫痢樣のものよりは望みが多いのです。

治療は食餌療法が治療の中心點であるから病の輕重に應じ適當量の食物を定め、量も食物の種類も定められた通り嚴守する以外によい方法はない。この治療の中心點をはづせば如何に服藥注射等其他の手當に賴つても無駄である。餘り長時に亙り極端な絕食もわるいが食物の量の多すぎるのは大いに惡い。注意すべきは禁食、絕食が徒に長時に亙らぬやうにすることで、一定時の禁食後は少量の食餌より始め徐々に增量する事で、病症の輕快に赴いてゐるのに徒らに恐怖して同一減食に止るのはわるい。食事の回數を增し一回量を減じ便の回數の減少と共に漸增するのが最も肝要であります。